

# 開始当初のモスクワ放送日本語番組

## —放送内容と批判

島田 顕<sup>†</sup>

### Japanese Programs of the Moscow Radio that Two and a Half Years Passed from the Start of Broadcasting:

Contents of Programs in Japanese,  
Criticisms and Improvements of Defects

Akira Shimada

In November, 1944, the monitor investigation of seven days was done to the Japanese broadcasting programs of the Moscow Radio that two and a half years passed from the start of the broadcasting, and as a result a lot of defects were pointed out. At that time, why has been done such a investigation?

The purposes of this study are to clarify the content of broadcasting programs in 1944 and defects and to consider the meaning of the monitor investigation at that time and the improvements of the entire system of broadcasting and the content of broadcasting which were pointed out at the investigation, based on the historical materials discovered in the RGASPI Archives in Moscow.

This paper consists of five sections: first, summary of study of the Moscow Radio and broadcasting programs in Japanese; second, Broadcasting content of Japanese programs (news of the War and commentary); third, Criticisms of receiving situation, announcements of announcer, translation from Russian to Japanese language, broadcasting content, slogan of "Kill the German occupants!" and the entire of programs (progressing of programs); fourth: Improvements of transmitter and receiving situation, translation, announcements and the entire of programs; fifth, Generalization of Radio broadcasting of Japanese programs to Japan.

#### 1. はじめに

1942年4月、ソ連の公式の国外向け放送であるモスクワ放送の日本向け日本語番組の放送が開始された。日本語番組の放送は、1929年から開始されていた公式の国外向け放送の一環であると同時に、1941年6月の大祖国戦争勃発直後からヨーロッパ諸国に向けて、コミンテルンが主導して開始された様々な秘密プロパガンダ放送（以下、特別ラジオ放送）と同様の役割も担っていたといえよう（島田顕 2016a: 84-92）。モスクワ放送の対外放送（イノラジオ）の番組も大祖国戦争以降、戦争に特化して大幅に改善されていった（Злобина 2009: 37-43）。戦時中の特別ラジオ放送もモスクワ放送も同様の性格を帯びていたが、ヨーロッパ諸国向けの特別ラジオ放送が戦争末期までの生命で、戦争の

---

<sup>†</sup> 関東学院大学経済学部講師

終了とともに電波からその姿を消したのに対し、モスクワ放送は戦後も続けられ、冷戦期の西側に対するプロパガンダを担った（伊藤昌弘他 1985, 島田顕 2016b: 25-31）。特別ラジオ放送は言語別、対象別に十数局が開局し、それぞれの番組が放送されたことは拙稿が指摘済みである。それらはヨーロッパ向けだったが、モスクワ放送はヨーロッパだけでなく、アジアにまで拡大されていった。

ところで、モスクワ放送も特別ラジオ放送も、それらの放送番組は当初から完璧なものだったわけではない。プロパガンダの役割を全うし、その効果を期待通りに発揮するものとは到底言えなかった。当初の放送には多くの欠点があり、その欠点を補い、改善が行われたのである。しかも改善の作業は一回だけではない。最初の改善が行われても、状況が打開されなければ、さらなる改善が求められ、何度も繰り返し改善が行われていたのである（島田顕 2016a: 84-92）。それではどのような欠点が指摘され、どのような改善の努力が行われたのだろうか。

ブローヴィナによれば、第二次世界大戦中のモスクワ放送の各編集部は、あらゆる論説、コメンタリーが最大限効果的なものになるよう目指したという（Злобина 2009: 37-43）。各国からの放送番組の聴取と速記録が組織された。これにより敵の放送に対する即応が可能になり、同じ日に敵の番組の中で伝えられた事実、事件に対するモスクワの視点を聴取者は知ることができた。論説は聴取者の個々のカテゴリーに向けられ、様々な地域の住民たちに対するアピールをその内容とした。加えて、敵国向けのラジオ番組の中で大きな位置を占めたのが小コラムであった。ドイツ向け放送の編集部によって、ラジオ小コラムのシリーズが電波に乗せて伝えられた。さらに、しばしば自国へとメッセージを送った戦争捕虜たちの出演、敵軍の戦死した兵士たちの手紙の一部で構成された特別番組もあった。また、大部分が風刺的性格を帯びていたラジオ小コラムも放送された。イタリア向け放送の編集部は、ムッソリーニを大いに笑いものにするラジオ小コラムのシリーズを準備した。その一つは「私の歴史的声明」と名付けられ、様々なムッソリーニの声明との対比の中で組み立てられたものだった。ラジオ放送のため、様々な番組が作られた。すなわち、前線からの特派員報告、反ファシスト大衆集会、戦争捕虜強制収容所の概要、ルポルターージュ、コラム、スケッチ、ラジオフィルム、文学作品の朗読、風刺劇上演、パルチザン、青年、婦人のための特別番組、音楽番組であった。もちろん、作戦のコメンタリー、辛辣な政治的評論もあった。番組の中で特別な位置を占めたのがショスタコーヴィッチ、プロコフィエフ、グリнка、ドゥナエフスキーの作品が鳴り響き、軍歌・愛国歌が各番組に含められた音楽である（Злобина 2009: 37-43, 島田顕 2016a: 84-92）。

日本語放送は 1942 年に開始されたことは前述したが、開始当初のモスクワ放送の日本語番組の放送内容はどのようなものだったのだろうか。これまで放送内容についてはあまり知られてはいなかった。戦中にモスクワ放送を実際に聞いていたという古参リスナーの証言によれば、その内容は、ニュースと解説だけだったという。筆者が 2016 年 9 月にモスクワの文書館で調査したところ、日本語番組の放送開始から 2 年経った 1944 年の 11 月の放送内容について記した史料が見つかった。発見された史料をもとに放送内容を断片的だが再現することができる。また史料には日本語放送の放送内容に対する改善点が指摘されていた。これらの改善点はいかなるものだったのか。そしてそれらはどのような意味を持っているのだろうか。

モスクワ放送の日本語放送についての先行研究だが、戦時中の日本語放送を扱ったものでは、特に日本語放送最初のアナウンサーであったムヘンシャンに関する拙稿（島田顕 2010: 121-135）、そして

日本語放送開始の背景を探った拙稿（島田顕 2016c: 125-134）、さらに岡田嘉子のいくつかの回想録（岡田嘉子 1983, 1986, 1999）、伝記（工藤正治 1972, 升本喜年 1993, 平澤是曠 2000）がある。片山やすの自叙伝（片山やす他 2009）、ジヴァニードヴァによる片山やすの伝記（Диванидова 2011）も僅かだが戦時中の活動について触れている。日本語放送ではないが、戦時中のモスクワ放送については前掲のズローヴィナに加え、シマンチュークのものが詳しい（Симанчук 2004）。さらにモスクワ放送以外の戦時中のプロパガンダ体制については、マグダーマツ他が全体的な状況を述べている（マグダーマツ他 1988）。また戦時中のソ連メディアの連携強化を扱った拙稿がある（島田顕 2016a: 84-92）。加えて特別ラジオ放送については複数の文献がある（『コミンテルン小史』1969, 『コミンテルンの歴史』1973, マイエンブルク 1985）。評者の東一夫については拙稿（島田顕 2015: 245-257）、そして木村慶一の回想録（木村慶一 1949）がある。

本稿の目的は、発見された史料をもとに、1944年当時の放送内容がどのようなものだったのか、また放送内容を含む放送体制全体に対する改善点が指摘されていたが、それらの改善点がどのようなものだったのかを明らかにし、改善の意味を考察することにある。

## 2. どのような放送内容だったのか

放送内容は、新たに発見された史料の中では特に、東一夫とロマノフの署名入りの文書「11月14日から20日までに中継された日本語でのモスクワからのラジオ番組の印象」と題された文書が伝えている（РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, л. 296, л. 60-65 об.）。

同文書によれば、日本語番組は次のように進められていたようだ。すなわち、①番組の冒頭、アナウンサーによる「只今から、日本語の報道を申し上げます」、もしくは「只今から、日本語報道のお伝えいたします」（ママ）との開始アナウンス。次に、②スローガン「ドイツ占領者どもを覆滅 [死滅] せしめよ」が叫ばれ、直後に「ソ連情報局発表」、もしくは「タス」の言葉を発された後に、③戦況ニュースの読み上げに移る。そして、④コメンタリー、最後に⑤スローガン「ドイツ占領者どもを覆滅せしめよ」がもう一度叫ばれて番組は終わる。スローガンがニュースの後、そしてコメンタリーの前に読み上げられることもありうるだろう。スローガンについては、「番組のはじめと終わりに」とあるので、上記①の前に叫ばれることも。またコメンタリーはニュースの後というのが定石だが、ニュースの前にもありえたのかもしれない。順序については、状況に応じて柔軟に変更されたのかもしれない。

放送内容は、戦況ニュースとコメンタリーの二つである。特に重要だったのが戦況ニュースだった。戦況ニュースが戦中のモスクワ放送の日本語番組の中心をなしていたといっても過言ではない。そして戦況ニュースでは、主にソヴィンフォルムビューロとタス通信の報道内容をそのまま翻訳して伝えていた。戦況ニュースの主な内容は、以下の4つにまとめられる。すなわち、①赤軍の戦果、②スターリンら政治指導部の演説、③ドイツの状況、④西側諸国の状況、である。①戦果に関する戦況ニュースでは、かなり細かい内容が伝えられている。例えば、「市であり、鉄道停車場である……占領した」（ママ）や、「……両手を挙げてロシア軍の方に向かって進んだのであったと」、「他の住民地点三〇カ所以上を占領した」（ママ）、「激烈な戦闘を行った後に N を占領した」と、戦線の様子を兵士の目線で伝えている。②演説については、「スターリンは決していい加減なことを言わないので

ある…」とスターリンを擁護する注釈の発言をも行っている。報道機関の中立性が疑わしくなるような発言といえよう。加えて演説について特徴的なのは、「スターリンは自分の演説の中で次のごとく述べたのでした」というように、スターリンに肩書・呼称をつけないで呼んでいることである。「スターリン同志」という通常行われている尊称もない。③ドイツの状況では「ドイツの状態は、本年の6月におけるよりも現在は、遙かに悪いのです」、「ヒトラー・ドイツの状態は絶望的なのです」と、ドイツ国内の状況悪化をことさらに強調している。反対に、④西側諸国の状況では、「…フランス、ベルギーの国境から、イタリーから…」と解放の様子があるままに描かれている。ここには誇張がないようだ。これとは反対に、前述の①赤軍の戦果では、「幾百の都市と村を解放した」、「祖国の土地の解放」と述べ、解放を最大限強調している。解放の意味も、「赤軍は、ファシストの奴隷たることから、人類を救っている」、「野蛮人の奴隷たることから救った」と述べ、ファシスト体制下の国民の生活が奴隷状態であり、そこから赤軍が国民を解放したことが、人類全体の成果であると主張しているのである。赤軍＝正義の軍隊という図式を押し付けているようだ。このことは、「戦闘旗を不朽の名誉をもって包み」、「不滅の武勲が行われた三周年を記念した」など、前線での些細な出来事を表現する際にも散見できる。アジベーフらは、コミンテルンのラジオ・プロパガンダの目的を、①ドイツ、イタリア、フィンランド、ハンガリー、ルーマニア軍の後衛での崩壊促進、②ドイツの軍事的敗北、ヒトラー主義の根絶、その軍事的マシンの破壊が、ヒトラーのドイツから人民のドイツを切り離すための唯一の方法であることを、人民のドイツの解放のためにヒトラーのドイツを撃滅するということを、ドイツ人民大衆、ドイツ人兵士の意識の中に深く植え付ける、③ヒトラードイツとドイツ帝国主義の従属下にある諸国の断絶を促進する、④ソ連人民とその英雄的赤軍とすべての国々の人民との効果的な連帯の必要性の証明、としている（Адибеков и др. 1997: 223-224, Коминтерн... 1998: 177-181）。また、1942年7月9日付の、コメンテーター、国別のラジオ放送編集部、政治活動家たちとコミンテルン執行委員会書記局会議の決議には、「特に、赤軍の英雄的行為、ねばり強さ、そしてそれらは、奪取された領土のわずかな場所のために敵が被った莫大な損失、国内の困難、飢え、敵の後衛における崩壊を強く示すことが必要である」とあり、赤軍の成果の強調がまさにプロパガンダの一環として行われていたことが分かる（Коминтерн... 1998: 240-241）。また戦況ニュースはすべてヨーロッパ戦線のものに限られていた。意図的に太平洋戦線のは省かれていたのだろうか。

コメンタリーでは、問いかけの文章もある。たとえば、「…注目に値すべきことは何でありましようか」というものであるが、聴取者の思考を単に促しているにすぎず、特別ラジオ放送のように、聴取者を一定の方向に行動させようという呼びかけ、アピールとは異なるものといえよう。

### 3. 批判

前述のように、モスクワ放送の他の言語の番組や特別ラジオ放送において改善が繰り返し行われていたのと同様、日本語放送でも番組改善の努力が何度も繰り返し行われていたことが史料からわかる。これにより日本語放送のプロパガンダ放送における位置づけが高かったことが想像できる。だからこそ改善の努力が続けられていたのではないだろうか。

史料で挙げられている当時の日本語放送の改善点は、要約すれば以下の4つにまとめられるだろう。すなわち、①受信状況について（受信機を含む聴取側の改善点）と送信側の改善点（送信機、送

信出力等), ②アナウンサーのアナウンスについて(イントネーション, 抑揚, アクセント, 読み方等々を含む発音全体), ③翻訳について(読み上げられている内容, 単語の選び方, 語順, 文法的, 文体的な観点から), ④番組全体について(読み上げの際の小休止, コメントリーの内容, 音楽, その他), である。

### ①受信状況について

受信状況について, ソ連人民委員会議附属ラジオ普及・ラジオ放送委員会議長プーズィンによる「全連邦共産党(ボ)中央委員会プロパガンダ・アジテーション局局长 G・F・アレクサンドロフ同志宛, モスクワの日本語ラジオ番組に関する情報」という文書で, 「1944年6月にラジオ委員会が東京から受け取った報告の中では, 我々のラジオ番組の東京での受信状況が不十分であると述べられている」と触れられているように, 日本での番組の受信状態は一般的に悪いと考えられ, 改善が急務であるとされていた(РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 55-57)。理由は日本製の受信機の技術的レベルの低さである。加えて当時の日本では短波放送の受信機の保持, 傍受は禁止されていた。他方で中波の受信機が日本では広く普及していた。だから短波を使ったモスクワからの日本語放送の聴取率は低かったのである。だが, 「アメリカ製の受信機, ソヴェト製の受信機では受信状況は良好である」とあるように, 日本製ではない受信機が日本国内に持ち込まれ, 放送が聞かれていたことがこのことからわかる(РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 47)。また, タス通信ラジオ聴取編集部ハバロフスク支部長シュガルによる「全連邦共産党(ボ)中央委員会書記, А・S・シェルバコフ同志宛」と題する文書は, 1944年11月14日から20日までハバロフスクで行われたモスクワからの日本語番組のモニタリング調査(この調査報告書が東ロマンノフの文書である)での聴取状況はかなり悪く, 調査が行われた僅か7日間で, 評者である日本人(東ロマンノフのこ)でさえ, 放送されている内容を書き留めることは非常に困難を極め, 毎日の三つの番組のうちの一つの内容でも把握することはできず, 個々の文章のみ聞き取ることができただけだったという(РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 53-54)。

### ②アナウンスについて

アナウンスに対する批判の矛先は, ムヘンシャン(本名緒方重臣)に集中している。片山やすもアナウンサーとして働いていたが片山に対する批判はない。まずシュガルによる文書では, 「アナウンサーの発音は正しくなく, 日本語になっておらず, 分かりやすいものではないし, 正しいイントネーション, アクセントではない。加えて, 読まれているテキストは早口であり, 句読点を遵守したものではない。これらすべては良好ではない聴取状況と合わさって, 番組を全く不可解なものにさせている」と述べられている(РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 53-54)。シュガルはアナウンサーの名前を出してはいないが, プーズィンによる文書では, アナウンサーのムヘンシャンが名指しで批判されている。プーズィンはまず, 東京からの報告「ラジオ番組の言葉遣い, 話し方, 発声方法は満足のいくものである」を引用したうえで, 「アナウンサーの話し方はかなりテンポが速く, 結果として, ラジオ番組の意味ある重要性が時折失われた」と真逆の評価を下している。加えてムヘンシャンについては, 日本語を熟知していると, いったんは持ち上げておいて, 彼が知っているのは日本語の中でも故郷の言葉だけであり, 話し言葉では訛りがあることを指摘している。このことについては, 「文化的

な日本人としては正しくないアクセントである」と厳しい。さらにムヘンシャンは、歯が欠けていた、もしくは歯がないことによって通常の発音ができない状態にあったことを暴露し、このことが明瞭な発音を妨げていたことを明らかにしている（РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 55-57）。ムヘンシャンには、九州弁の訛りがあったことが知られていたが、批判はどれも厳しいものである。

東たちは名指しではないが、さらに細かく指摘している（РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 60-65 об.）。まずアナウンサーの発音がはっきりとしない、全く不明瞭であること、そして文章におけるいかなる小休止も行わず、このことが聴取を大変困難にさせていると。加えて、アナウンサーの発音が非常に不自然で、日本語とはいえないもので、標準語のアクセントとは異なるアクセントを入れること、例えば文章の終わりに、必ずおかしい語気の上げ方をすると指摘している。「…注目に値すべきことは何でありましょうか」という問いかけの文章で、連続して単調な声で読みながら、語気の変化を全くせずに発音している。これについては、「ラジオ番組は聴取者の関心を全く呼ぶことなく、反対に、聴取者に不快な印象を呼び起こしている」と辛らつな批判を行っている。また問いかけの文章の際に、一拍置かずに、直ちにこの問いかけに対する答えとなる文章に移ることは、聴取者の側に感情の高まりを全く呼び起こすことができないと指摘されている。たとえ受信状況が良好でも放送されている内容を理解するのが困難なくらいの早口であることも問題として取り上げている。

単語については、「ソ連情報局」を「ソー連情報局」と発音していること、「スターリン」を「スタアリン」と発音していること、「南方」を「なんぼう」ではなく「なんぼう」と発音していること、「8日」を「ようか」ではなく「はちにち」と発音していること、「すなわち」を「すなはち」と発音していること、「え」を「いえ」と発音している、例えば、「占領」を「せいえんりょう」、「政府」を「せえいふ」、「政治家」を「せえいじか」、「説明」を「せえいめい」と発音している等々、アナウンサーの個々の単語の発音の間違いを指摘している。

### ③ 翻訳について

日本語のテキストについてシュガルの文書には、「文法的、文体論的過ちを多く含んでおり、間違っただ、そして完全に日本語とはいえない言い回しを含んでいる。未熟で幼く、ロシア語そのままの訳[直訳]である」とある（РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 53-54）。当時、主に翻訳を担当していたのが野坂龍であったことから、このことは野坂龍（モスクワにいた日本共産党幹部である野坂参三の妻、偽名はキムシャン）が翻訳したテキストの文章自体が悪いということを示していることになる。だがプーズィンの文書では野坂に対する批判はなく、「ラジオ番組の中にある個々の過ち、日本語への翻訳の不正確さは、編集機構の注意深さが欠けている」ことから起こっているのだと釈明している（РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 55-57）。

これに対して東たちの文書では名指しはなく、単に、翻訳のやり方、単語の言いまわし方、語順等が批判の俎上に上がっている。おそらく東たちには誰が翻訳していたのか知らされていなかったのだろう。東たちは、「かなり多くの日本語とは言えない、不自然な話の展開がある」と述べ、いくつか例を挙げている。「我が軍隊」は「我が軍」とした方がよいし、「市であり、鉄道停車場である……占領した」は「……市及び同停車場を占領した」と直すことを求めている。文末の「であったと」の表現を「ということである」と直すべきとしている。前述したドイツの状態を表す文章は、「現在のド

イツの状態は本年6月の状態より遙かに悪化しているのです」と話した方がはるかにわかりやすく聞こえると述べている。同様に「ヒトラー・ドイツの状態は絶望的なのです」の文章も、「ヒトラー・ドイツは絶望的な状態にあるのです」と、さらに理解しやすくなるよう単語の順番を変えることを提案している。さらに、「住民地点」という単語を「村落」の単語に置き換えること、文法上不自然である単語の意識を促している。個々の単語については、「激烈な戦闘」は「激戦」に、「高射砲兵の攻撃によって」を「地上砲火によって」に、「自分の演説の中で」は、「その演説の中で」と、「幾百の都市と村を解放した」を「数百の市町村を解放した」と、「祖国の土地の解放」は「祖国の国土解放」、もしくは「祖国領土の解放」とすべきとしている。加えて、「たること」という言い回しはあいまいなので極力避けようとしている。「野蛮人の奴隷たることから救った」は「奴隷としての生活」、「奴隷としての境遇」、もしくは「奴隷化」に直せという。「軍は、不十分にしか資材の件で保障されていない」も「軍は十分に資材を（資材の供給を）保障されていない」と改めるべきだと述べている（РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, л. 296, л. 60-65 об.）。

だが指摘の中には、必ずしも直さなければならない、というものばかりではない。例えば、「スターリン名称の…工場」の表現の「名称」を取り、単に「スターリン…工場」とすべきとしているが、「ロモノフ名称（またはロモノフ記念）モスクワ国立大学」という言葉もある。「ソヴェトの国に対して」は「ソヴェト国に対して」に、「ソヴェトの人々」は「ソヴェト国民」に置き換えることを求めているが、これはそのままでよいものといえよう。

総じて番組では直訳の傾向があることが指摘されている。ロシア語からの直訳が常に日本語のように響かないわけではないし、ソヴィンフォルムビューロのニュース、演説、記事その他の引用において、正確な翻訳が必要である場合もあるが、直訳によってしばしば日本語自体の意味が失われ、文章が不自然なものとなり、日本語ではないように聞こえるということだ。

#### ④スローガンについて

東たちは、「ドイツ占領者どもを覆滅せしめよ!」、「ドイツ占領者どもを死滅せしめよ!」というスローガンに着目している。前述のようにこのスローガンは番組のポイントごとに叫ばれるもので、非常に重要なものとみなされていた。この訳を完全に間違えたものとして、「どのような場合においても、スローガンとして日本人に受け取られることはできない」と述べ、「おそらく我々はドイツ占領者どもを死滅するだろう」とか、「そうだ、私は、もしくは、私たちは、ドイツ占領者どもを死滅するんだ」と誤解されて受け取られてしまうと警告し、「ドイツ占領者どもを覆滅せしめよ!」の代わりに、「屠れ!ドイツの占領者どもを!」にすべきだと述べている。「屠れ!」の言葉が日本で今、「敵の殲滅、殺戮」が述べられるときに使われているからだだと理由を示している（РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, л. 296, л. 60-65 об.）。

東たちのスローガンの翻訳に対する批判と新たなヴァリエントの提案に対して、高名な日本語学者であるコンラッド、ジューコフはそれぞれ、「モスクワ放送のラジオ番組における、スローガンの日本語への翻訳に関する意見」と題する意見書を寄せ、反駁している。つまり現行の「ドイツ占領者どもを死滅せしめよ!」という翻訳は、全く正しいものであるとしているのである。コンラッドはその理由として、東たちの批判が明らかな誤解に基づいていると指摘し、東たちの「あいまいさがおこりうる」との

批判に対し、このような危険はないと反論している。また東たちのヴァリアントの「屠れ！」が「家畜の屠殺」をも意味することから、このヴァリアントを排除している（РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 58）。

ジューコフはさらに、「ドイツ占領者どもを死滅せしめよ！」の原案を全く不正確であると指摘することは、根拠を全く持たないとしているが、よりエネルギー的な表現に合うものを探すことには同意できると述べている。東たちの提案が、スローガンの断固たること、そして強烈さを上手く表現していて、原案よりも、ダイナミックなものと評価している。しかしながら「屠れ！」については、「死」の概念をあまり反映したものはいえないとしている（РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 59）。

### ⑤番組全体について

批判をまとめるならば、どうすれば放送番組が効果的なものになるのかということが述べられている。総じて日本語番組に向けられた批判は辛らつなもので、東たちは「不完全であり、東京からのものはいうまでもなく、サンフランシスコ、デリー、重慶等々から行われている日本語のラジオ番組よりも悪い」としている（РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 60-65 об.）。

読み方についてだが、一つのニュースを読み終え、そして間断なく、次のニュースを読み始めることは、最初のニュースの内容と次のニュースの内容が同様のものであった場合、ラジオ聴取者が二つの別々のニュースを一つのニュースであるかのように間違っ受け取ってしまうおそれがあると指摘されている。また一人の同じアナウンサーが、ニュースの題名を読み、すぐさま、ニュース自体の読み上げに移っていることも挙げている。例えばNHKや民放のニュースでもよく見られるが、今では別々のアナウンサー（理想的には男女のアナウンサー）が項目ごとに交互に読むことが当たり前となっている。

さらに、ソヴィンフォルムビューロ、タス通信のニュースの報道の際に突然「ソ連情報局発表」「タス」の言葉を発し、すぐさまニュースの読み上げに移っていることが批判された。突然に言葉を発して読み上げが始まることは、ニュースを聞くための心の準備ができていない状態で聞くために、内容の最初の方は聞き逃されてしまう可能性が高い。さらに、ニュースの日付がないことの指摘もある。当時は生番組であり、ニュースがすべて当日の出来事であることを前提にしていたためである。

史料では音楽の必要性が指摘されていた。間に音楽を挟むことで一休みできるからだ。しかしモスクワからの日本語のラジオ番組の時間に、音楽が全く放送されていない。これについては、当時の東京、サンフランシスコ、デリー、重慶からのラジオ放送局の日本語の番組では、必ず音楽が流されていたことも併せて述べられている。

コメンタリーについては、かなり多くの演説もしくは記事の断片が多用されていて、コメンタリー自体が煩雑なものになっていることが指摘されている。解説というよりはむしろ、通常の情報に近いものとなっていて、コメンタリーの目的である情報の説明、聴取者にこれらの意味の理解を理解させることが達成されていないということだ。記事、演説の多用により、「ラジオ聴取者の側に退屈しかよび起こさない」というのである。

放送は、25分間の放送時間でニュースのテキストを読み切るだけのものだったようだ。このことは岡田嘉子も回想録で記している（岡田嘉子 1983: 217, 1986: 82, 1999: 205）。おそらく既定の放送時



間以上に内容を入れようとする態度、詰め込みすぎがすべての原因だったと想像できる。読み方に加えて、内容の取捨選択がなかったことも推測できる。つまり早口であるというのは強いられているということも考えられるということだ。

#### 4. 改善点

##### ①送信機と受信状況の改善

前述のように1944年6月にラジオ委員会が東京から受け取った報告の中で東京での受信状況が不十分であり、改善が必要なことが指摘されていた。これを受けてプーズィンは、「この後、ラジオ番組の技術的基盤が強化された」としているものの、具体的な成果は明らかになっていない（РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 55-57）。さらに1944年11月のモニタリング調査を受けたシュガルの文書では、「番組の良好な聴取状況を保証するためには、モスクワからではなく極東の何らかのポイントから放送すべきである。もしくは、モスクワでより強力な特別な指向性を持つ送信機を選定するための措置を取るべきである」との改善点が指摘されていた（РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 53-54）。おそらく6月の報告を受けて、1944年11月に本格的なモニタリング調査を行うことになったのだろう。そしてこのモニタリング調査の結果により、「11月20日から、モスクワからのラジオ番組用に、極東の送信機によって日本に向けて後続の再送信を伴うRTsAの送信機が供用されている。RTsAの送信機自体の技術的なデータによれば、極東でも良好に聴取できるはずである」という改善が行われた。加えて、タス通信ハバロフスク支部を通じて、1945年の1月13日、14日にさらなるモニタリング調査が行われたようだ。その結果を、「RTsA送信機の活動の調査は、送信機の満足のいく、良好な受信状況を示した。上記送信機の活動の継続的監視は、送信機の活動のさらなる改善と日本語ラジオ番組の満足のいく聴取状況の保証に向けた措置を講ずることを可能にしている。ラジオ委員会は、上記のラジオ番組の強化の他の技術的手段を今のところ目論んではない」と述べ、改善と調査が満足のいくものであったことを報告している（РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 55-57）。だが根本的なところは解決されなかったようだ。つまり日本で広く受信・聴取されるためには、日本のラジオ受信機普及状況を鑑み、中波に切り替えるべきなのに、中波での放送は行われなかったようである。当時のソ連はクイヴィシエフに1200キロワットの中波送信機を持っていた。だから技術的なことは可能だった。それなのに中波にしなかったのはなぜか。日本語番組の電波を中波に切り替えて、聴取の幅を広げる必要がなかったということなのだろうか。

##### ②アナウンスの改善

シュガルは述べていないが、プーズィンはアナウンサーがテキストの読み方を改めたことを明らかにしている（РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 55-57）。また東たちは具体的な読み上げ方の改善方法を提示している。例えば、各文章のしかるべき場所に句読点を配置することや、文章が長いならば、いくつかの言葉ごとに小休止すること、問いかけの文章で語気を若干上げること。聴取者の側に感情の高まりを呼び起こすことのために、問いかけのフレーズ「文言」を発音し、アナウンサーは5～6秒間停止し、その後、答えとなるテキストに移ること。アナウンサーの5～6秒間の沈黙があって、この次にあるべき答えに対する聴取者の興味関心がさらにより強くなるとしている。さらに、アナウン

サーに一度、はっきりしない発音、正しくないアクセントがあれば、なおさら、彼が急がないで、ゆっくりと読むことが必要であることを述べている（РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 60–65 об.）。

史料ではムヘンシャンを更迭する必要性が指摘されていた。シュガルの文書では、「アナウンサーとして、地方のなまり言葉ではなく、日本語の標準語の発音ができる日本人を招聘すべきである」ことが述べられていた（РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 53–54）。だがプーズィンは、「アナウンサーの交代は現在のところ不可能と思われる。日本語が堪能で、アナウンサーの技能を有している別の人物をどこからも得ることができないのである。他の優秀なアナウンサーを採用するまでに、話し言葉の改善のためのしかるべき活動を確かめつつ、ラジオ委員会は現職のアナウンサーを使用することは可能だと見ている」と述べ、更迭の可能性を否定した（РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 55–57）。ただ、ムヘンシャンの更迭案は、岡田嘉子を放送局へ招聘後、ムヘンシャンが急に姿を消したことを暗示するものといえる（岡田嘉子 1983: 217, 1986: 82, 1999: 205）。ムヘンシャンは KUTV（東方勤労者共産主義大学）の学生の時に出自を偽ったことによって肅清の恐怖を経験した（島田顕 2010: 121–135）。だから戦後にムヘンシャンが肅清された可能性も十分ありうる。

アナウンス改善の切り札が、片山やすであることがプーズィンにより指摘されている。だが軍事大学と外務人民委員部学校の教授の仕事が彼女にはあり、放送局には半分だけしか勤務できていないことを明らかにし、彼女を教育活動から解放してラジオでの仕事に専念させることの必要性を訴えている（РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 55–57）。だが教育活動とプロパガンダのどちらが重要だったのかと問えば、戦時下ではプロパガンダの方がはるかに重要だった。それができていないことは、片山やす側の甘え、わがままもあったのではないだろうか。ちなみに、日本語放送開始以前のアナウンサーの第一候補は片山やすだった（РГАСПИ, ф. 495, оп. 74, д. 622, л. 55–56., ВКП (б) ... 2001: 706–710）。だが片山が疎開先のウズベク共和国（現ウズベキスタン共和国）のフェルガナからモスクワに帰還するのが遅れたことにより、ムヘンシャンが最初のアナウンサーとなったことは拙稿が指摘した（島田顕 2016c: 125–134）。当初から訛りが抜けないムヘンシャンのアナウンスは問題となっており、何らかの改善が必要だったことは明らかであった。それでもムヘンシャンがそのままアナウンサーとして原稿を読み続けていることは、片山に対する何らかの優遇があったのではないかと勘繰りたくなる。印象としては、ムヘンシャンについては厳しく、キムシャン、片山やすに対しては批判の矛先は決して鋭くはない。大甘である。

### ③ 翻訳について

翻訳についてシュガルは、「テキストは、文法上、文体上の過ちを避けるために、またテキストの乱暴なロシア化を避けるために、教養のある日本人によって日本語に翻訳されなければならない」としている（РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 53–54）。東たちは、直訳で意味が失われているという状況に対して意識するよう求めている。「往々にして、ロシア語のテキストの日本語への翻訳の際に、正確な文字通りの訳が求められるような場合をのぞいて、ロシア語のテキストの言葉の特別な意味を持たない形式主義的な保持を避けなければならない。そして日本語のように聞こえ、日本人に容易に理解されるよう意識されなければならない」と指摘している（РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 60–65 об.）。とりあえずの改善策としてプーズィンは、「日本語ラジオ番組編集部には、原稿の日本語へ

の翻訳すべてをより綿密に検査するための厳格な指示が与えられた」ことを明らかにしているが、具体的にどのように変化したのかはわからない（РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 55-57）。

キムシャン（野坂龍）についてプーズィンは、「ロシア語から日本語への翻訳者として、ラジオ委員会では同志キムシャン（オカノ）が働いている。教養があり、ロシア語から日本語への翻訳の能力のある人物である。キムシャン同志は、他の若干の養成を経た翻訳者の翻訳の編集を行っている」と、キムシャンを高く評価し、翻訳の問題の責任は編集部にあるとしている。だが、個々の訳語の責任はまず翻訳者であるキムシャンが負うべきである。このようにキムシャンに対しては批判が向けられていないのは奇異である。在モスクワ日本共産党最高幹部の妻ということが影響していたのだろうか。キムシャンはコメンタリーのみを訳していて、戦況ニュースはロシア人が訳していたということも考えられる。局舎（プチンコフスキー横丁2番地）ではなく、宿舎であるホテル・ルクスでのみキムシャンが翻訳し、職員が部屋まで原稿を取りに来ていたという話が伝わっているからだ。刻々と変化する戦況に対応するために、このような翻訳の分担があったとすれば、ニュースが未熟で幼稚な訳になったということも納得できる。

#### ④番組全体について

読み方についてだが、東たちにより、前述したニュースとニュースの間に小休止を設けることに加えて、「次にソ連情報局（もしくは、タス通信）の発表を申し上げます」と話し、その後あまり長くない小休止を続けて、さらに「ソ連情報局発表（もしくは、タス通信発表）」と話すべきで、加えてニュースの日付を挙げるのが提案されている。つまり、「次にソ連情報局の発表を申し上げます。ソ連情報局…月…日発表」と。そしてさらに、ニュースの内容を伝えるのである。

音楽を入れることについては、必ず番組の最初と最後に、そしてまた最後のニュースとコメンタリーの間インターバルで、日本のレコード、もしくは何らかのソヴェト、もしくは外国の良いレコード〔の演奏〕があることが望ましいとしている（РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 60-65 об.）。

## 5. おわりに

前述のような番組改善点の指摘、改善の努力はどのような意味を持っていたのか。改善は見られたのだろうか。まず、前述の文書から、開始当初の日本語番組がどのような放送内容だったのかがわかる。また日本語番組の状況についても理解できる。コンラッド、ジューコフという高名な日本語学者をも番組改善に巻き込んでいたことが指摘できる。改善について幅広く意見を聞く場を設けていたことがわかる。

前述したように、ムヘンシャンの九州訛りからくる、標準語とは異なるイントネーションやアクセントその他を除けば、すべての原因は、放送時間内にはまりきらないほどの戦況ニュースを詰め込みすぎていることにあるようだ。膨大な量のニュースを電波に乗せるために、早口でしゃべらせることになり、小休止もなくなり、間を置くこともなく、音楽すら入らないことになったことは想像に難くない。詰め込みすぎをやめなければ、改善提案は活かされない。折角東たちが改善提案した読み方や音楽も、実施されたかどうかは文書からはわからない。おそらく、その多くが結局そのままにされたのではないだろうか。特に音楽については、モスクワ放送の他の言語の番組ですでに実施されていた

し、戦時中のモスクワ放送で多大な効果があったにもかかわらず（Злобина 2009: 37-43）、日本語放送では全く実施されていなかった。1929年からの対外放送の経験も活かされていなかったのである。

そもそも、この時期の日本語放送は一般大衆の聴取者を対象としていたものではなく、広く伝えることを考えていなかったのではないだろうか。それをうかがい知ることができるのが、「ラジオ委員会が東京から受け取った報告」とあることだ。このように日本で放送が聞いていたのは、ごく一握りの者たち、優秀な短波受信機を持っていた者たちだけだったようだ。しかもそれらの者たちは、ソ連と何らかの関係を持っている者たちだということが想像できる。それらの者たちにとっては、ラジオでの呼びかけやピールよりも戦況ニュースの方が重要だったようだ。もっとも、日本国内での短波ラジオ普及率の低さも相まって、広く一般に聞かれることがなかったことも事実である。また音楽を入れるという娯楽も必要なかった。ただし東たちによって、娯楽とは異なる理由で音楽を入れる意味があることが指摘されていることは前述したとおりである。

なぜ、この時期まで改善されないまま、劣悪なまま放送が野放しにされていたのか。それとも、1944年11月までにすでに何らかの改善努力が行われていたのだろうか。少なくとも改善の必要性は感じていたが、改善できなかったといえるだろう。戦況ニュース中心の方針もあるし、片山やすの多忙などの要因はすでに指摘したとおりである。それでは、なぜこの時期に改善が求められたのだろうか。それは、1944年11月以降、日本との戦争が迫ってきたからではないだろうか。つまり、日本を内部から切り崩すことが必要になってきたのではないか。そのためには聴取の幅をさらに広げる必要があった。そのための改善だったといえよう。

東についてだが、すでに拙稿（島田顕 2015: 245-257）が取り上げたように、未だに謎の多い人物であることは間違いない。戦時中、越境（つまりはソ連への亡命）した後、長らく拘束されていたが、ハバロフスクでのタス通信での勤務を開始し、戦後にはモスクワ放送のハバロフスク局からの日本語放送に携わる。前述の史料は、ハバロフスク放送局以前の東の戦時中の仕事を物語るものといえる。加えて、東たちの改善ポイントはおおむね的確なものだったといえよう。東たちが出した批判、改善提案はシュガルによってまとめられたといえる。東の指摘は、東の日本語に対する真摯な向き合い方を物語るものである。東の翻訳に対する真摯な態度については、木村慶一も次のように記している。すなわち、「東は優れた翻訳者である。『これではだめだ、日本人の感情に食い入る迫力がない。君が来てくれてから、文書は非常によく滑らかになった。しかしこれも或る限界までだ、君も苦勞のし甲斐がなくて気の毒だ』。優れた翻訳者なるがゆえに、東にはよく判るらしかった」（木村慶一 1949: 108）と。そして前述史料での改善提案が東を放送局へと導いたといえる。つまり自身が指摘した改善点を実行に移す最適の人物として抜擢されたのだろう。だが、すでに筆者が指摘したように、東たちの提案は必ずしも改善しなければならないというものばかりではない。それだけ日本語というものは他の言語に比べて難しい言語だということだ。

この後日本語放送はどうなったのだろうか。おそらく、人事等の大幅な刷新は行われず、戦争終結までおそらくこのままの状態が続いたことが想像できる。放送内容は、ドイツの降伏によって変化を余儀なくされたに違いない。戦時中は伝えることがなかった日本関連、極東、中国、太平洋、アメリカの動きのニュースを伝えるようになったのではないだろうか。1947年に岡田嘉子が入局し、ムヘンシャンが姿を消す。さらに東たちが入局しハバロフスク支局からの日本語放送も始まった。そして

1950年代にはさらなる刷新が行われたことが確認されている。戦後の日本語放送の刷新は、冷戦の時代に突入し、共産主義プロパガンダが本格化したのと奇しくも呼応している。

最後に、今後の課題について述べたい。まずは戦中のさらなる放送内容、放送原稿、番組制作の方針等についてはさらに確実な文書をつかむことである。ムヘンシャンの消息も気になるところである。人物では、ロマノフとは一体誰なのか突き止めることだ。さらに同時期に始まった朝鮮語放送についてはこのような放送改善の動きはなかったのかどうかも確かめる必要がある。特に、戦後の冷戦時代の刷新がどのように行われて、戦中の改善の努力と比較してどのような意味を持つのかを把握しなければならない。これらについては稿を別にして論ずるつもりである。

## 史料

- РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 47.: [各国語別のラジオ放送の状況について述べている文書, 題名なし, 日付なし]
- РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 53-54.: Секретарю ЦК ВКП (б) тов. Щербакову. А. С. [題名は「全連邦共産党 (ボ) 中央委員会書記, А.С. シェルバコフ同志宛」, 差出人はタス通信ラジオ聴取編集部ハバロフスク支部長シュガル, 日付は1944年12月23日]
- РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 55-57.: Начальнику Управления Пропаганды и Агитации ЦК ВКП (б) товарищу Александрову Г. Ф., Справка о московских радиопередачах на японском языке. [題名は「全連邦共産党 (ボ) 中央委員会プロパガンダ・アジテーション局長 G・F・アレクサンドロフ同志宛, モスクワの日本語ラジオ番組に関する情報 [spravka]」, 差出人はソ連人民委員会議附属ラジオ普及・ラジオ放送委員会議長 A・ブーズィン, 日付は1945年3月1日]
- РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 58.: Замечания по поводу перевода на японский язык лозунга «Смерть немецким захвачикам» в Московских радиопередачах (Н. Конрад). [題名は「モスクワ放送のラジオ番組における, スローガン『ドイツ占領者どもを覆滅せしめよ!』の日本語への翻訳に関する意見」, 差出人は N・コンラッド, 日付はない]
- РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 59.: Замечания по поводу перевода на японский язык лозунга «Смерть немецким захвачикам» в Московских радиопередачах (Е. Жуков). [題名は「モスクワラジオで日本語に翻訳されている, 『ドイツ占領者どもを覆滅せしめよ!』というスローガンに関する意見」, 差出人は E・ジューコフ, 日付はない]
- РГАСПИ, ф. 17, оп. 126, д. 296, л. 60-65 об.: Впечатления от радиопередач из Москвы на японском языке, транслировавшихся с 14 по 20 ноября. [題名は「11月14日から20日までに中継された日本語でのモスクワからのラジオ番組の印象」, 差出人は東一夫 [漢字の署名, 手書きとロシア語の署名, 手書きがある] と V・ロマノフ [ロシア語の署名, 手書き], 日付はない]

## 参考文献

- 伊藤昌弘, 森本真章『モスクワ放送ふんま帳 赤い電波』(山手書房, 1985年)
- 岡田嘉子『心に残る人びと』早川書房, 1983年。
- 岡田嘉子『ルバーシカを着て生まれてきた私』婦人画報社, 1986年。
- 岡田嘉子『悔いなき命を』日本図書センター, 1999年。
- 片山やす他『わたしの歩んだ道 父片山潜の思い出とともに』(エリザヴェータ・ジワニードワ編, 小山内道子編訳, 成文社, 2009年)
- 川越史郎『ロシア国籍日本人の記録 シベリア抑留からソ連崩壊まで』中央公論社, 1994年。
- 木村慶一『モスクワ・日本・ハバロフスクー対日モスクワ放送員の手記一』(川崎書店, 1949年)
- 工藤正治『岡田嘉子 終わらなき冬の旅』双葉社, 1972年。
- 『コミンテルンの歴史』(ソ連共産党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所編, 村田陽一訳, 下巻, 大月書店, 1973年)
- 『コミンテルン小史』(ソ連科学アカデミー編, 高山林太郎訳, 刀江書房, 1969年)
- 島田 顕「ムヘンシャン—モスクワ放送最初の日本人アナウンサーの軌跡」『早稲田大学アジア太平洋討究』第14号, 2010年3月, 121-135頁。
- 島田 顕([訳])「東一夫関連文書(ロシア国立社会政治史文書館所蔵)」『早稲田大学アジア太平洋討究』第25号, 2015年12月, 245-257頁。
- 島田 顕「大祖国戦争勃発直後のコミンテルンのラジオ・プロパガンダ強化策」『Intelligence』第16号, 2016年3月31日, 84-92頁。
- 島田 顕「木村慶一—シベリア抑留者の便りを伝えた男」『ユーラシア研究』No. 54, 2016年8月, 25-31頁。
- 島田 顕「第二次世界大戦中のモスクワ放送—モスクワからの日本語放送はいかにして開始されたのか—」『早稲田大学アジア太平洋討究』第27号, 2016年10月, 125-134頁。

平澤是曠『越境—岡田嘉子・杉本良吉のダスヴィターニャ』北海道新聞社, 2000年。

ルート・フォン・マイエンブルク『ホテル・ルックス—ある現代史の舞台』(大島かおり訳, 晶文社, 1985年)

ケヴィン・マクダーマット, ジェレミ・アグニュー『コミンテルン史—レーニンからスターリンへ』(萩原直訳, 大月書店, 1988年)

升本喜年『女優 岡田嘉子』文芸春秋, 1993年。

Г. М. Адиеков, Э. Н. Шахназарова, К. К. Шириня, *Организационная структура Коминтерна 1919–1943*, М., 1997.

*ВКП (б), Коминтерн и Япония 1917–1941*, М., 2001. (日本語版:『資料集—コミンテルンと日本共産党』(和田春樹/G・M・アジベークフ監修, 富田武/和田春樹編訳, 岩波書店, 2014年))

Е. Диванидова, *Дочь японского революционера*, М., 2011.

*Голос, который знаком всему миру, Российскому Иновещанию—80 лет!*, М., 2009.

Валентина Злобина, *«Московское радио» в годы Великой Отечественной Войны*, в кн. *Голос, который знаком всему миру, Российскому Иновещанию—80 лет!*, М., 2009, с. 37–43.

*Коминтерн и вторая мировая война*, часть 2, после 22 июня 1941г., М., 1998.

И. Симанчук, *Голос России, Документально-публицистическое повествование*, М., 2004.